

By Architect,

ーひとりの建築家がみる世界ー

Keywords

住まうこと 建てること 集合住宅 無名の建築
人生 建築し続ける 増改築 可変性



DZ22126 大巻 里桜

1. はじめに

家は、本来ひとつとして同じものはないはずだ。そこに生きる人が違えば、時間の流れも、集う人の関係も、日々の重なり方も異なる。暮らしとは、本来きわめて個人的で、移ろいやすい営みである。それにもかかわらず、私たちの住まいは「nLDK」というひとつの型へと整理され、商品として均質に流通している。似た間取りの中で、異なる人生が無理に折り畳まれていく。いつの間にか人が家に合わせて生き、空間の側が暮らしを規定しているような感覚さえ覚える。そのような状況の中で私たちは「住まうこと」の本質を見失いつつあるのではないだろうか。

2. 研究背景

2.1 住宅の変遷 近代以降の住宅

近代以降の住宅は、効率性や合理性を重視するなかで空間の標準化を進めてきた。nLDKという構成は、多様な生活を一定の枠組みに収めることで、設計や供給を容易にし、大量生産を可能にしてきた一方で、暮らしの個性や変化の余地を縮減してきた。

2.2 住まうことと建てることの不一致

マルティン・ハイデガーは「建てることの本来の目的は住まうことである」と言った。しかし、現代において私たちは本当に「住んでいる」と言えるのだろうか。住まいは用意され、空間はあらかじめ設計され、生活は効率よく配置されている。私たちはその中に身を置き、与えられた動線をなぞりながら日々を過ごしている。そこにあるのは、確かに「暮らし」ではあるが、それは必ずしも「住むこと」と同義ではない。かつて、住むことは建てることと地続きであり、考えることと切り離されていなかった。空間は手を動かしながら更新され、住まいは時間とともに変化し続ける存在であった。しかし現代において、建てることと住むことのあいだには、静かな断絶が生じている。建築は完成された物として引き渡され、人はその後に入り込むだけの存在となった。住まいは「選ぶもの」となり、「使うもの」となり、やがて「消費するもの」へと変わっていく。私たちは空間に住

んでいるようでいて、実のところ、空間に適応させられているだけなのかもしれない。

2.3 無名の建築

世界各地のヴァナキュラー建築や、都市に点在する無名の増改築住宅には、住民の欲求と環境への適応の積層として、時間の痕跡が刻まれている。そこには、暮らしの変化に応答しながら即興的に空間を更新していく、もう一つの建築の姿がある。目まぐるしく変化する時代において、建築家が描く「完成形としての未来予想図」は、果たしてどこまで有効なのだろうか。むしろ、変化そのものを前提とし、住みながら設計し続ける仕組みを建築として内包することが、これからの集合住宅に求められているのではないか。



図1 建築家なしの建築

3. 目的

これにより、建築を「完成されたモノ」ではなく、住民とともに育ち、書き換えられ続ける「時間の構造物」として再定義することを試みる。建築家は、未来を一方的に規定する存在ではなく、住民の物語に寄り添いながら、変化を編集し、媒介する存在へと役割を転換する。本提案は、「住むこと」「建てること」という原初的な関係を、現代の集合住宅において再構築することを目指すものである。

4. 対象敷地

対象敷地は、東京都文京区根津駅周辺の一部である。この場所では「住むこと」がいまだ生活の実感として残りながらも、同時に現代的な分断を内包している都市である。根津は、谷中・千駄木と連なる下町的な文脈を持ち、路地や坂、個人商店や住宅が折り重なるように存在

している。そこでは、建物が時間と共に増改築され、住まいと生業、私的領域と公的領域が緩やかに混ざり合いながら、生活が更新されてきた痕跡を見ることができる。一方で、根津駅という交通結節点を中心に、都市は確実に再編されつつある。集合住宅の増加、土地の細分化、生活と切り離された建築の供給などにより、建てることは個人の手を離れ、住むことは選択・消費への対象へと変化している。かつては生活の延長として行われていた空間の更新が、制度や市場の論理によって制限され、「住みながら建てる」関係性は失われつつある。

根津は、過去の生活の重なりと、現代都市の均質化がせめぎ合う場所である。建てることと住むことがかろうじて接続されていた記憶と、それらが断ち切られていく現在とが同時に存在している。この場所に建築を挿入することは、失われつつある関係性を回復するための実験であり、「住むこと＝生きること」を再び空間として立ち上げる試みである。

5. プログラム

5.1 提案

ひとりの建築家が住民の人生に合わせて設計をしていく。建築が住まいに寄り添うことで建築家として「住まうこと」について再考し、6住戸の集合住宅を設計する。本計画は、完成形をもった集合住宅を提示するものではない。住まう人の人生や関係性の変化に応答しながら、建築そのものが更新され続ける状態をプログラムとして組み込む。日々の行為や習慣、家族構成の変化、身体や仕事の変化。それら具体的な人生の断片を設計の出発点とし、物語を空間へと翻訳していく手法をとっている。家族構成の変化や暮らし方の揺らぎは、本来、住空間に表れるべき出来事である。本集合住宅では、それらを想定外として排除するのではなく、増築・改修・用途のずれといったかたちで建築に刻み込む。各住戸は固定された機能を担う箱ではなく、住まう行為によって役割や輪郭が変化する余地をもつ。その変化は個人に閉じることなく、集合全体の構成や風景へと波及していく。変化し続けることそのものを内包した集合住宅。住まうことと建てることが分離されない状態を、このプログラムは目指している。

5.2 設計手法

大学卒業後の2026年から自らが建築家になったと仮定して退くまでの約50年間で住民の人生に合わせて設計していく。

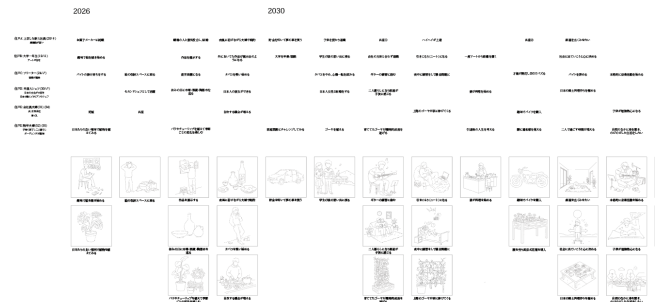


図2 住民の人生に寄り添った設計手法

6. さいごに

建築は、完成した瞬間に終わるものではない。むしろ、そこから始まる人々の暮らしの中で、書き換えられ、重ねられ、揺らぎ続ける存在である。本計画を通して伝えたいのは、建築とは「つくること」ではなく、「生き方を支え続けること」という視点である。住まいは、人生の変化を受け止め、迷いを許し、遠回りを包み込み、時には立ち止まる場所となる。

その痕跡が積層したとき、建築は単なる器を超え、人の時間を宿す存在へと変わる。効率や合理性によって均質化された現代の住環境の中で、私たちはいつの間にか、「住むこと」を自ら考え、つくり変える自由を失ってきた。本提案は、その自由をもう一度、住み手のもとへ取り戻す試みである。住むことと建てることを再び結び直し、暮らしの中に、建築を取り戻す。この集合住宅は、完成形を示すための建築ではない。ここで示したいのは、変わり続けることそのものが、建築の価値になり得るという可能性である。建築が、人の人生とともに呼吸し、ともに老い、ともに育ち続ける存在であるとき、そこには、今までとはまったく異なる「住まうことの風景」が立ち現れるだろう。

参考文献

- 1) 多木浩二：生きられた家，青土社，2019年5月
- 2) B・ルドフスキー：建築家なしの建築，1984年1月
- 3) 中村貴志 訳・編：ハイデッガーの建築論，2012年11月



Time line

2026

建築を「完成されたモノ」ではなく、住民とともに育ち、書き換えられ続ける「時間の構造体」として再定義することを試みる。建築家は、未来を一方的に規定する存在ではなく、住民の物語に寄り添いながら、変化を編集し、媒介する存在へと役割を転換する。本提案は、「住むこと」「建てること」という原初的な関係を、現代の集合住宅において再構築することを目指すものである。

この住宅を設計した建築家は、すべてを決めるのではない。
完成した後も、住み始めてからの変化に立って、続ける「不思議な存在」として、住民に寄り添いながら、必要なときにだけ、わずかな手を加える。建築を完成させるのではなく、建築が住むこととつながることを信じている。

そうした出来事が繰り返るたびに、住戸は「完成された空間」で生活をやめ、生活に引き寄せられるように形を変えていく。壁が外され、床が継ぎ足され、居場所がずれ、用途が書き換えられる。建築は、人生の変化に対して答えを与えるのではなく、受け止める器として振る舞う。

彼らの人生は、順調に進むわけではない。別れ、失敗、貧しさ、身体の衰え、死への意識。

夢を追いつながら暮らす若者。
上京したばかりの新人社員。
家族を持ち、関係が変化に向き合う人。
孤独や喪失を抱えながらも、再び他者とながらうとする人。
子育てを終え、老いとともに暮らしを耕し続ける夫婦。

本計画は、ひとつの集合住宅として、そこに住まう六つの人生を描いた建築の物語である。
完成したばかりの集合住宅で、六つの住戸すべてが同じ条件で設計された同じ形で引き渡される。しかし、そこに住むか違えば、生活のリズムも、価値観も、の出来事も異なる。住み始めた瞬間から、空間は少しずつ歪み、更新され、やがて均質ではなくなった住戸は、それぞれまったく異なる表情を持ち始める。

By Architect,
- ひとりの建築がみる世界 -



2076